

子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Maternal Birth Weight as an Indicator of Early-Onset and Late-Onset Hypertensive Disorders of Pregnancy: The Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

妊婦の出生体重と早発および遅発型妊娠高血圧症候群発症との関連

ユニットセンター(UC)等名: 宮城ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Pregnancy Hypertension

年: 2023 年

DOI: 10.1016/j.preghy.2023.11.002

筆頭著者名: 田上 和磨

所属 UC 名: 宮城ユニットセンター

目的:

妊娠高血圧症候群(HDP)は、周産期予後不良な妊娠合併症である。HDPはその発症時期(早発型か遅発型か)により、周産期予後の重症度が異なる。HDPの発症時期を考慮しつつ、本研究では妊婦自身の出生体重とHDP発症との関連を検証することを目的とした。

方法:

エコチル調査の3歳時全固定データを使用し、77,345人の妊婦を対象とした。母体(妊婦自身)の出生体重を2,500g未満、2,500-2,999g、3,000-3,499g、3,500-3,999g、4,000g以上に分類した。HDP発症時の妊娠週数により、HDPを早発型(妊娠34週未満)、早産期の遅発型(妊娠34週~36週)、および妊娠37週以降の遅発型に分類した。既知のHDP発症リスク因子を調整因子とし、多項ロジスティック回帰モデルを用いて解析した。

結果:

母体の出生体重が低いほど、早発型HDP、早産期の遅発型HDP、妊娠37週以降の遅発型HDPの発症頻度が高い傾向であった。母体の出生体重3,000-3,499gを基準とした場合、母体の出生体重が2,500g未満では、早発型HDP、早産期の遅発型HDP、妊娠37週以降の遅発型HDP発症の調整オッズ比(95%信頼区間)はそれぞれ1.052(0.665-1.664)、1.745(1.220-2.496)、1.496(1.154-1.939)であった。

考察(研究の限界を含める):

母体の低出生体重がHDP発症に関連したことは、先行研究の結果と一致していた。さらに、本研究では、HDP発症の妊娠週数にかかわらず、母体の出生体重が低いほどHDP発症のリスクが上昇することを示した。また、母体の低出生体重は早発型HDPよりも早産期の遅発型HDP、および妊娠37週以降の遅発型HDPの発症とより高めた。したがって、周産期管理の際に母体の出生体重を事前に把握することは、HDP発症時期を考慮したHDPハイリスク症例の同定に有用である可能性がある。本研究の限界として、HDPのサブタイプ(妊娠高血圧腎症、妊娠高血圧)に関する情報が得られなかったことが挙げられる。

結論:

HDP発症時の妊娠週数にかかわらず、母体の出生体重が低いほどHDP発症のリスクは高かった。また、母体の低出生体重は早発型HDPよりも早産期の遅発型HDP、および妊娠37週以降の遅発型HDPの発症とより強く関連していた。